	<h2 style="color: red;">論考自己評価</h2> <h3 style="color: red;">SCE・Net 小松昭英</h3>	<h2 style="color: red;">E-137</h2> <p style="color: red;">発行日 2020.12.4</p>
---	---	---

約2年半前から、自分の名前を「ネット検索」して、そのアクセス数の増加を記録してきた。まず、その結果を表1に示す。そして、まず気が付くのは、アクセス数が、和名が

表1 自己氏名検索結果

自然検索調査	年(曜日)	2018(金)	2020(日)	増加比
	月/日/時	02.09.23	11.22.12	
小松昭英	検索数	1,080	22,700	21.0
	順位	1-10	1-7,9,10	
	アクセス数	567	12,723	22.4
Komatsu Shoei	検索数	251,000	513,000	2.0
	順位	1-5,7-10	1,5,9,10	
	アクセス数	126,178	143,230	1.1
合計	アクセス数	126,744	155,953	1.2

約22倍に、英名が1.1倍になっており、それでも和名が英名の約10分の1に過ぎないことである。

アクセス数をもって「自己評価」とするのは、短絡的なようにも感じられるが、まず「自己評価」と「本人評価」をグーグル翻訳すると、前者は”Self assessment”で、後者は”Personal evaluation”と

なっている。辞書を引くと、”personal”には「自分が行う」という意味があることから、前者がよさそうである。しかし、よくよく考えてみると、「自己評価」の結果をみて、「本人評価」をして、自己満足あるいは不満足しているようである。

そして、従来、アクセス数にしか興味がなかったが、そのアクセス数によって立つ要因

表2 氏名検索項目

No.	小松昭英	Shoei Komatsu
1	小松昭英	Shoei Komatsu
2	小松昭英	
3	「偶然の連鎖」 (SCE・Netの窓(E-103))	
4	小松昭英	
5	小松昭英	An Essay on Project Management Models
6	プロセスシステム設計	
7	An Essay on Project Management Models	
8		
9	P&Pインタビュー	「サイバースペースと検索エンジン」(SCE・Netの窓(E-114))
10	D-5リアルオプションによる医薬開発プログラム評価	小松昭英

が気になりだした。ということで、この「エッセイ」を書いている次第である。

まず、和名と英名についての検索項目を表2に示す。

この表を見てまず驚いたのは、和名3位、英名9位に、この「SCE・Netの窓」の2つのエッセイが入っていることである。また、和名、英名の両方に記載された論文があることである。

この論文は、国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌(2010)<sup>1</sup>に掲載されたもので、NII Electronic Library

Service から検索されている。和題は「プロジェクト・マネジメント・モデル論考」である。なお、この本論文は「プロジェクト・プログラム・プランニング・マネジメント序説」（筆者(2009)<sup>2)</sup>）を引用し、当該論文は「情報システム開発プログラムのマネジメントモデル—適応型多重スパイラルアップマネジメント」（筆者(2007)<sup>3)</sup>）であり、英訳したのが”Japanese Project Management”(Ohara & Asada (2009)<sup>4)</sup>に収録されている（”Komatsu (2009)<sup>5)</sup>”。そこで、この論文のアクセスを表 3 に示す。

表 3 情報システム開発プログラムのマネジメントモデル

自然検索結果	年	2020
	月/日/時	11.18.12
情報システム開発プログラムのマネジメントモデル (2007)	検索数	5,660,000
	順位	1
	アクセス数	1,195,392
Management Model of Information Development Program-Adaptive Multiple Spiral-Up Management (2009)	検索数	3,630,000
	順位	1-2
	アクセス数	1,153,251
合計		2,348,643

話を戻して、この”An Essay on Project Management Models”の検索結果に驚いたのは、この論文は「本人評価」では忘却の彼方であったし、元来同学会はホームページに学会誌の論文は掲載して

いなかったからである。また、NII Library Service の存在も全く知らなかった。

ここで、上述の検索をした 22 日が日曜日だったので、念のため平日の 24 日火曜日に再検索してみた（月曜日は休日）。その結果を表 4 に示す。まず、この表をみると、予想通り、

表 4 自己氏名検索結果

自然検索調査	年 (曜日)	2020 (日)	2020 (火)	増加比
	月/日/時	11.22.12	11.24.14	
小松昭英	検索数	22,700	26,100	1.15
	順位	1-7,9,10	1-10	
	アクセス数	12,723	15,083	1.19
Komatsu Shoei	検索数	513,000	523,000	1.02
	順位	1,5,9,10	1-9	
	アクセス数	143,230	293,665	2.05
合計	アクセス数	155,953	308,748	1.98

和名であれ、英名であれ、検索数が増えている。

さらに、その検索項目を表 5 に示し、表 2 と比べると、和名項目は殆ど変わらないが、英名項目の違いは、予想以上に大きかった。共通する項目は皆無であった。

そして、対照的なのは、しかも

同じ 6 位に、和名が、「プロセスシステム設計」(1971)<sup>6)</sup>で、英名が”An Essay on Business Assessment”(2011)<sup>7)</sup>であることである。

すなわち、筆者にとって、前者は「プロセスエンジニアリング」の集約的存在であり、後者は「ビジネスエンジニアリング」の「マネジメントサイクル」最重要段階の一つであり、最もアクセス数の多い論文の一つである。そのアクセス数を表 6 (次頁) に示す。

そして、驚くべきことに、なんと約 7 千万のアクセスがある。一方、これも驚くべきことであるが、なんと和文のアクセスは英文の 9 千分の 1 に過ぎないのである。

表 5 自己氏名検索項目

No.	小松 昭英	Shoei Komatsu
1	小松昭英	Shoei Komatsu
2	小松昭英	Shoei Komatsu
3	小松昭英	Shoei Komatsu
4	偶然の連鎖	Shoei Komatsu
5	小松昭英	Shoei Komatsu
6	プロセスシステム設計	An Essay on Business Assessment
7	小松昭英	Shoei Komatsu-Amazon
8	P&Pインタビュー	Komatsu Shoei
9	D-5 リアルオプションによる 医薬開発プログラム	Komatsu Shoei
10	PMAJ表彰	-

表 6 ビジネスアセスメント

論文自然検索結果	年	2020 (水)
	月/日/時	11.25.15
ビジネスアセスメント 序説 (2011)	検索数	36,500
	順位	1
	アクセス数	7,709
An Essay on Business Assessment (2011)	検索数	572,000,000
	順位	3
	アクセス数	69,955,600
合計アクセ		69,963,309

表 7 システムズエンジニアリング

自然検索調査	2020 (金)	
		11.27.10
システムズエンジニア リングの系譜	検索数	16,600
	順位	1
	アクセス数	2,503
Genealogy of Systems Engineering	検索数	27,000,000
	順位	1
	アクセス数	4,071,600
合計アクセス数		4,074,103

システムズエンジニアリング」にせよ、「ビジネスエンジニアリング」にせよ、これらがその原因の有力候補になっていると言えよう。

これに似た例がある。それは「システムズエンジニアリング」の例で、まず、アクセス数を表 7 に示す。「ビジネスアセスメント」ほどではないが、和文のアクセスは英文の 1 千 6 百分の 1 に過ぎない。

ここで、気が付いたことがある。元々この「エッセイ」は「自己評価」を目指したものであるが、期せずして「社会評価」すなわち "Social Evaluation" (Google 翻訳) にもなっているのである。

この「システムズエンジニアリング」については、この「SCE・Net の窓」(E-106)(2019.5.24)<sup>8</sup>でも述べたことであるが、我が国の認識は殆ど存在してないともいえる状況にある。

この「システムズエンジニアリング」「ビジネスエンジニアリング」の位置づけは、図 1 (筆者(2017)<sup>9</sup>) (次頁) のように考えられる。すなわち、「システムズエンジニアリング」は各種の個別エンジニアリングの共通基盤的存在であり、「ビジネスエンジニアリング」も例外ではないと考える。

そして、「ビジネスエンジニアリング」の不在は、間違った「企業経営指標」の存在を許しているのである (スターンシュワート社(2001)<sup>10</sup>)。

すなわち、周知のように、「我が国の生産性」は諸外国に比べて劣っている。その原因は種々あろうが、「シ

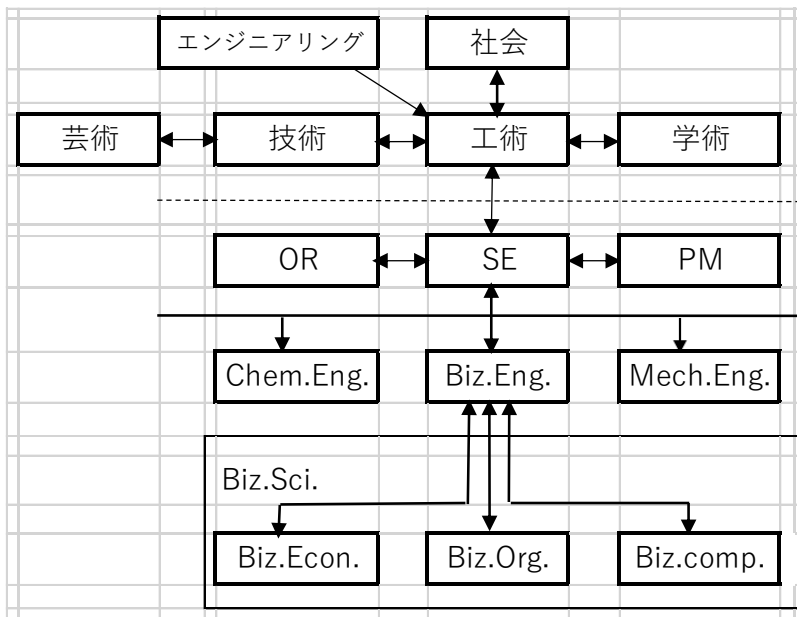


図 1 技術・学術関連図

なお、この図 1 では、「工学」(学術)と「エンジニアリング」とは違うことを強調すべく、「工術」という用語を敢えて使っている。

また、「Biz.Econ.」、「Biz.Org.」そして「Biz.Comp.」はそれぞれ、「エンジニアリングエコノミクス」、「企業組織論」そして「ビジネスコンピューティング」に対応させている。

#### 文献

- 1 小松昭英、プロジェクト・マネジメント・モデル論考、国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌、Vol.5, No.1, pp.89-102, 国際プロジェクト・プログラム学会、2010
- 2 小松昭英、プロジェクト・プログラム・プランニング・マネジメント序説、国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌、Vol.4, No.1, pp.57-70, 国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会、2009
- 3 小松昭英、情報システム開発プログラムのマネジメントモデル—適応型多重スパイラルアップマネジメント、国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌、Vol.2, No.1, pp.51-62, 国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会、2007
- 4 Ohara, S., Asada, T., Japanese Project Management-KPM-Innovation, Development and Innovation, World Scientific, 2009
- 5 Komatsu, S., Management Model of Information Development Program-Adaptive Multiple Spiral-Up Management, Japanese Project Management- KPM-Innovation, Development and Improvement, pp. 129-141, World Scientific, 2009
- 6 小松昭英・梅田富雄、プロセスシステム設計、工業調査会、1971
- 7 小松昭英、E1-2 ビジネスアセスメント序説—収益構造の同定、国際 P2M 学会誌、Vol.6, No.2, pp.209-221, 国際 P2M 学会、2011  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/iappmproc/2010.Spring/0/2010.Spring\\_209/pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/iappmproc/2010.Spring/0/2010.Spring_209/pdf)
- 8 小松昭英、システムズエンジニアリング雑感、SCE・Net の窓、E-106、産学官連携センター、化学工学会、2019  
<http://sce-net.jp/main/wp-content/uploads/2019/05/e-106.pdf>
- 9 小松昭英、論考ビジネスエンジニアリング、総合知学会誌、Vol.16, pp.153-188, 総合知学会、2017  
[http://www.sougouchi.org/blog/wp/wp-content/uploads/sj/2017/p155-190\\_KomatsuShoei.pdf](http://www.sougouchi.org/blog/wp/wp-content/uploads/sj/2017/p155-190_KomatsuShoei.pdf)
- 10 スターンスチュワート社、EVA による価値創造経営—その理論と実際、ダイヤモンド社、2001